2025.7
JULY
No.29

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊［おらんくの大学病院］

RANK

“Never give up”
の精神で最高のがん診療医を目指していく！

呼吸器・アレルギー内科 教授
上月 稔幸

RANK
2025.7 JULY No.29
高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊［おらんくの大学病院］
［発行日］2025年7月20日 ［発行］高知大学医学部附属病院 広報係 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 Tel.088-880-2723

高知大学医学部附属病院

http://www.kochi-u.ac.jp/kms/hsptl/index.html

＼広報担当者のつぶやき／

肺がんセンターの談話の中で『縦割り式の組織では後手に回ってしまう』という言葉がありました。自分の仕事を振り返り、身につまされます。

『縦割り式』は、自分の仕事に責任を持って取り組める半面、『私の仕事ではない』と一線を引くための逃げ口上としても使われてしまいがちです。個人としては楽なのですが、職場全体として、効率的に動けているか、というと疑問が残ります。

肺がんセンターは『患者さんの利益を最優先に』という目的のもと、連携を深めます。自身としても、縦割りにとらわれず、全体の利益を目的に取り組んでいきたいと思います。

“Never give up”

の精神で最高のがん診療医を目指していく！

すべての可能性を見逃すことなく、常にチャレンジし続けていくことの大切さ

中学時代から培った医師になる夢を叶え、
肺がん治療に専念して四半世紀。
医療への高い志は、衰えるどころかモチベーションは高まる一方と
笑顔の上月稔幸教授の“いま”を尋ねてみた。

高知県の肺がん治療の
環境改善を使命と感じています。

呼吸器・アレルギー内科 教授
上月 稔幸
（こうづき としゆき）

はじめに、上月先生の取り組みや、研究分野について教えてください。

若い頃は、主に抗がん剤治療の治療効果予測因子の探索や、耐性メカニズムの解析などに取り組んでおりました。

近年はというと、日々進化し続ける新規治療薬や治療法の研究開発のほか、デジタル化などに重点を置いた取り組みに力を入れております。

ご専門の肺がん診療について伺いますが、高知県における肺がん診療の現状についてお話しください。

肺がん診療は通常、呼吸器内科・呼吸器外科の先生方が中心に行うものですが、高知県においては残念ながら呼吸器内科や呼吸器外科の医師数が十分ではありません。さらには、これら診療科の先生も高知市、南国市に集中しがちのため、幡多地域、安芸地域などの郊外ではまだまだ不足していて、課題は山積していると言っても過言ではないでしょう。

肺がん診療の均てん化を図るためには、まず人材育成が必要です。さらには医療環境の改善、加えてより一層地域医療への関心を高めながら医師の偏在緩和に努めて行くことが急務だと捉えています。

日々進化する治療法に、大学病院ならではのメソッドで対応していく

そういった課題が残されている中で、大学病院の立ち位置や、呼吸器・アレルギー内科における今後の構想などをお聞かせください。

とりわけ、この10年、肺がん治療および開発における進歩には目を見張るものがあり、現在の薬物療法の中心は、これまでの細胞障害性抗がん薬から分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬へと移行し、これら新しい薬剤を用いることで進行期の症例のみならず、切除可能な症例に対しても予後の改善に大きな成果を発揮しております。

肺がん領域では診断の細分化に加え、相次ぐ新薬の開発など、治療方針も目まぐるしく進化していることから、我々医療スタッフは常に最新の知識を入手していきながら、大学病院ならではのメソッドで患者さん一人ひとりに合った最良の治療方針を決めていく必要があります。

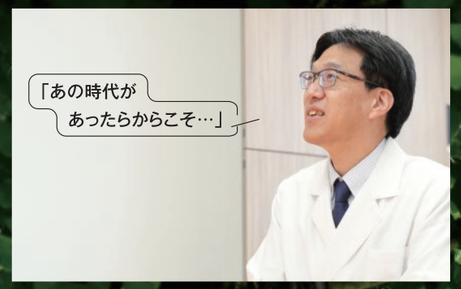
ここからは、上月先生のプライベートな部分にもふれていきたいと思いますが、どんな子ども時代を過ごされましたか。

活発な子だったと思います。大体いつも、周りの友達と高い所に登ったり、とにかく外に出て遊んでいましたね。今、自分が親の立場になってみると、子どもがそのような場所で遊んでいるとヒヤヒヤで見ていられないでしょうね。

また、身の回りのいろんなものへの興味も人一倍ありまして、家中のあらゆる物や電気製品を分解して遊んだものですから、親に叱られることが多かったですが、一方でちゃんと直すことも多くありました。(笑)。

言い方を変えるなら〝何事にも好奇心旺盛な子ども〟でしたし、多分その頃からチャレンジし続ける大切さや自分自身に諦めないことの重要性を見い出していたように思います。

そんな先生が医師という職業を意識しはじめたのは、いつ頃からでしょうか。



確か中学生の頃だったと記憶しています。きっかけは忘れてしまいましたが、ホスピスに興味が湧き、どうすればそこに関われるかを考えるようになりました。そのことが医師を目指すモチベーションに繋がっていったのでしょうね。

医学部受験から医師免許取得まで、苦労したことや忘れられない出来事はありますか。

ええ、あります(笑)。医学部受験の時も、もちろん大変でしたが、今でも時折思い出すのが、医師国家試験受験までの期間です。毎日毎晩記憶力の限界と戦いながら、睡魔に負けじと早朝から深夜まで1日中勉強していました。昨日のことのように思い出されます。いやぁ、体力、気力ともに本当にきつかったです!

思いは変わらず、呼吸器内科一択という選択

その後、呼吸器系の内科を専攻した理由は何だったのですか。

私の中で、医師を目指すきっかけとなった〝緩和医療への興味〟が根強くて、自然にがん診療や緩和治療に関わる道を目指した、という感じです。中でも肺がんは、罹患者数第2位、死亡者数1位というところから、進行期の肺がん診療に携わる呼吸器内科を選択しました。

先生が、これまでに印象に残っている患者さんや症例を教えてください。

もう20年ほど前になるでしょうか。進行性の肺がん診療に対し、細胞傷害性抗がん薬しかない時代に、ゲフィチニブという分子標的治療薬が登場したのです。それまで病状がひっ迫していて治療が難しい状況の患者さんに使用したところ劇的な効果を認め、見る見るうちに元気になられ、歩いて退院されたことがとても印象に残っています。

ただこの患者さんに限らず、これまで担当させていただいた患者さん方お一人お一人から、実に多くのことを学ばせていただきました。こういった経験の積み重ねが、医師としての喜びや意欲につながっていくのでしょうね。

高知に来られる前とその後では、高知県のイメージに変化はありましたか。

実はこれまで高知県には縁もゆかりもありませんでした。それまでの高知のイメージとしては、お酒好きの人が多く、特に食べ物や料理が新鮮でおいしいこと。あとはよさこい祭りの踊りの熱気やアンパンマン、坂本龍馬の出生地という感じでしょうか。ただ誰もがお酒に強い印象でしたが、意外に下戸の方が多くて、別の意味でびっくりしました。

何しろ初めての土地ですから、土佐弁も覚えながらこちらの患者さん方としっかり心を通わせ、医師として一人でも多くの患者さんのお役に立ちたいと思っています。

理想の医師を目指して!

では最後に、ご自身が目指す医師像についてお聞かせください。

患者さんから信頼され、笑顔にできる医師になるには知識や経験、技術面だけでなく本人は元よりご家族や周囲の方々の思いまで尊重できる人間性を備えていなければと思います。これからもそんな医師像を目標に、〝Never give up〟の精神で、日々切磋琢磨してまいります。

呼吸器・アレルギー内科
教授 **上月 稔幸** (こうづき としゆき)

[経 歴]

1998年 岡山大学医学部 卒業
2008年 岡山大学大学院 医歯学総合研究科 病態制御科学専攻 血液・腫瘍・呼吸器内科学 修了(医学博士)

1998年 医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 初期研修医
2000年 医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 後期研修医
2001年 玉野市立玉野市民病院 内科
2005年 医療法人未来 医師
2006年 クリーブランドクリニック、トーシックがんセンター、研究員
2009年 国立病院機構四国がんセンター 呼吸器内科医師
2013年 国立病院機構四国がんセンター 臨床研究センター 臨床研究推進部 臨床試験支援室長
2018年 国立病院機構四国がんセンター 臨床研究センター長
2024年 高知大学医学部 教授 現在に至る

[専門分野]

呼吸器疾患全般、胸部悪性腫瘍、がん薬物療法

[専門医等資格]

日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・指導医、
日本呼吸器学会認定呼吸器専門医・指導医・代議員、
日本臨床腫瘍学会認定がん薬物療法専門医・指導医・協議員、
日本がん治療認定医機構がん治療認定医、
日本肺癌学会 評議員、日本石綿・中皮腫学会 監事、日本医師会認定産業医

「肺がんセンター」発足に向けて

劇的進化を遂げる、肺がん治療のいま！

「肺がん」と診断されても、センターの治療で笑顔の日常生活を取り戻していただく！

当院における肺がんセンター設立までの経緯と現在の肺がん治療などについてお聞きします。

上月　肺がんの治療開発は、急速に進歩していまして、治療が細分化、複雑化していくことで、患者さんにより きめ細やかで丁寧な治療を実施することが可能になりました。それに伴い、診療科の垣根を超え、各分野の専門家とより密接に連携を取りながら、治療を進めていくことが求められています。

例えば、近年の肺がんに対する薬物療法では、バイオマーカーに基づいて薬剤を選択します。薬物療法の専門医はもとより、病理診断部や放射線診断科との連携が必須となります。本学では、こういった現状に柔軟に対応するために、新たに「肺がんセンター」の立ち上げに踏み切った次第です。

田村　ひと昔前の肺がん診療は、外科治療（手術）と内科治療（薬物療法、放射線治療など）の棲み分けが比較的はっきりしていました。しかし近年では、もちろん手術のみで治療が完結する症例もまだ多いですが、手術前後に薬物療法や放射線治療を施行する症例も増えてきており、診療科の垣根を低くした診療が必要となっています。それゆえ縦割り式の組織では後手に回ってしまい、対応が遅れる可能性も否定できないのです。

木村　放射線治療科に紹介される場合、基本的に呼吸器内科・外科で診断がついてからになるため、場合によっては初診からずいぶん時間が経過していて、治療開始への準備を焦ることがあります。今回のセンター化で診断から治療開始までの時間が短縮できれば、そういった問題も緩和され、準備も余裕を持って十分に出来るようになりますね。

今回のセンター設立は、患者さんにとっても大きなメリットがある話なんですね。

木村　そうです！まず選択肢が広がることが大きなメリットです。標準治療として手術が検討されている場合でも、高齢者の多い高知県の現状や昨今のSDM（共同意思決定）の観点から、標準治療以外の選択肢も示す必要がありますが、これまでは患者さん側がこの機会を逸してきたケースが多かったのではないかと推察されます。センター化により、これが解消されることを期待しています。

他にも、様変わりすると思われるところはありますか。

田村　やはり、患者さんにとってストレスになっていた待ち時間でしょうね。これまでは、呼吸器外科にご紹介いただいた患者さんで手術適応が無かった場合、再度呼吸器内科や放射線治療科に予約を取らないといけなかったのです。場合によっては2～3週間待ちということも。東西に長い高知県ですから、幡多や室戸など遠方からの患者さんにもやむを得ず、来院をお願いしていましたが、心身ともに大変なご負担だったと思います。そういった部分が解消され患者さんのご負担が軽減されるメリットは、非常にうれしいですね。

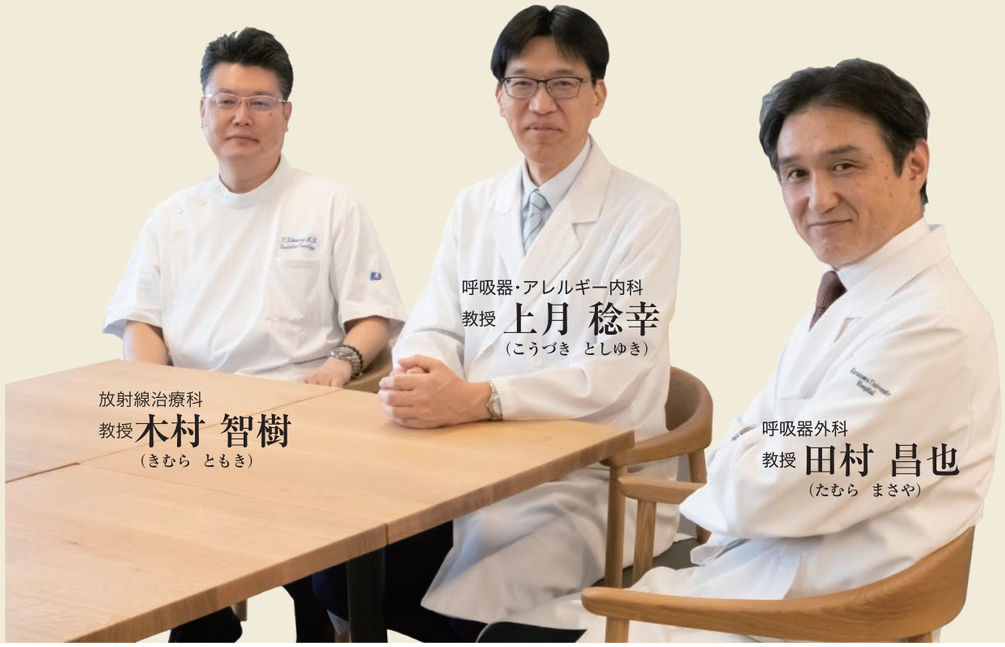
本院から、県内医療機関の先生方にお伝えしたいことはありますか。

田村　実は以前、幡多地区の先生に『大学病院は予約が中々取れず、数週間も待たされてしまうなら他の病院に紹介する。』と言われたことがあって、とても申し訳なく、未だに悔しい記憶として残っています。肺がんセンターの設立で肺がん患者さんの紹介窓口が一本化されますから、これからはお待たせする時間も短くなり、不安なく本院にお任せいただけるのではと期待しています。

上月　ご紹介いただく先生方に対しても、これまでは、診療科の選定をはじめ、予約を取る際にもお手間をおかけしていました。今後は「肺がんセンター」に患者さんをご紹介いただければ、診療科を指定していただく必要はありませんし、連携して対応させていただくことで受診までの日数も短縮できるかと思います。

もちろん、患者さんの不安などを考慮して、「肺がんセンター」ではなく、これまで通り、呼吸器・アレルギー内科や呼吸器外科にご紹介いただいても問題ありませんので、気軽にご相談いただきたいです。

肺がんセンターの今後の展望をお聞かせください。

上月　残念ながら、肺がんの患者数は今後20年間、大きく減少することはないと推計されています。一方で治療は年々進歩しており、治療の選択肢も広がる中、最適な治療を行うことで予後の改善が期待されています。

こうした状況の中、もしも肺がんと診断されたとしても、本院に肺がんセンターがあることによって安心して質の高い治療が受けられ、病気とうまく向き合いながら、笑顔あふれる日常生活を取り戻すことができる――そんな未来を願っています。